

『禅法要解』に組み込まれた 『サウンダラナンダ』の四諦説

田 中 裕 成

1. はじめに

鳩摩羅什は五世紀の冒頭に活躍した翻訳僧であり、『法華経』や『中論』を始め多くの貴重な仏典を翻訳したが、その中に禅経と言われる修行マニュアル群が存在する。その中でも『坐禅三昧経』は研究者の注目を集め、とりわけよく研究されている。松濤 [1981] は僧叡の序分を手がかりに、『坐禅三昧経』を分析し、その中に『サウンダラナンダ』等の馬鳴詩が含まれていることを指摘した。その後、Hartmann [1988] や管野 [1994, 1995] は『大智度論』に「禅経」として『サウンダラナンダ』が引用されることを指摘し、管野 [2002] は『禅法要解』においても散文の形で『サウンダラナンダ』が二偈ほど用いられていることを指摘した。このように鳩摩羅什訳出資料や禅経と『サウンダラナンダ』は密接な関係を持っていることが先行研究で明らかになっている¹⁾。

さて、『禅法要解』は『坐禅三昧経』と密接な関係を持つ世間道を中心に説く禅経であるが、管野 [2002] 以外に本経を積極的に取り扱った研究は存在しない。そのなか、筆者は『禅法要解』の四諦の説示に『サウンダラナンダ』の四諦説が組み込まれていることを発見した。そこで拙稿 [2019b] において、ネパール写本に基づく Johnston [1928] と、中央アジア写本に基づく Hartmann [1988] と、今回発見した『禅法要解』の道諦の説示とを比較検討した。その

1) この他にも、『大智度論』中の馬鳴詩を探った研究として上野 [2015] が存在する。

結果、『禅法要解』は中央アジア写本と対応し、さらには『サウンダラナンダ』本来の文脈に沿ったものであることが明らかとなった。また、その一方で、ネパール写本の異読はいずれも説一切有部の教義に対応するように調整されたものである可能性を見出した。つまり、ネパール写本にのみ基づく『サウンダラナンダ』研究は危険を孕んでいるといつて良いであろう。Hartmann [1988] によって回収されたのは『サウンダラナンダ』四諦説中の道諦を中心とした一部であるが、『禅法要解』には四諦説のほぼ全文に相当する分量 (SN.16.6-40) の対応句が見いだせた。現在の『サウンダラナンダ』研究においてはネパール写本に依るところが多く、中央アジア写本との対応も見いだせる『禅法要解』中の『サウンダラナンダ』は貴重な資料と言ってよいであろう。

そこで本稿では、漢訳二巻からなる『禅法要解』(No.616) のうち、四諦について述べる箇所 [大正: 15.294a11-295a18] の和訳を提示し、それに対応する『サウンダラナンダ』ジョンストン本 (SN.16.6-40) との対応関係を示したい。なお、紙面の関係から今回は漢訳の翻訳と対応箇所の提示にとどめ、『サウンダラナンダ』そのものの分析や訳注、および『禅法要解』そのものの分析や『サウンダラナンダ』以外の並行句の分析についてはそれぞれ別稿に譲りたい。

2. 和訳と SN. 対応箇所

『禅法要解』

問曰。云何爲四諦。答曰。苦諦集諦滅諦道諦。苦有二種。一者身苦。二者心苦。集亦二種。一者使。二者悩纏。滅亦二種。一者有餘涅槃。二者無餘涅槃。道亦二種。一者定。二者慧。

現代語訳

【問】問う。四諦とは何であるか。【答1】答える。苦諦、集諦、滅諦、道諦である。苦に二種有る。一つは身体 of 苦しみ、二つは心の苦しみである。集にも二種ある。一つは使、二つは悩纏である。滅にも二種ある。一つは有餘涅槃、二つは無餘涅槃である。道にも二種ある。一つは定、二つは慧である。

『禪法要解』

復次苦諦有二種。一者苦諦。二者苦聖諦。苦諦者惱相故。所謂五受陰名爲苦諦。苦聖諦者。以知見故修道。是名苦聖諦。

集諦有二種。一者集諦。二者集聖諦。集諦者出生相。所謂愛等諸煩惱²⁾名爲集諦。集聖諦者。以斷故修道。是爲集聖諦。

滅諦有二種。一者滅諦。二者滅聖諦。滅諦者寂滅相。所謂四沙門果。是名滅諦。滅聖諦者。以證故行道。是爲滅聖諦。

道諦有二種。一者道諦。二者道聖諦。道諦者出到相。所謂八正道。是名爲道諦³⁾。道聖諦者。以修故行道。是爲道聖諦。

復次諦有二種。總相別相。總相苦者。五受陰。別相苦者。廣分別色陰受想行識陰。

現代語訳

【答2】また次に、苦諦は二種である。一つは苦諦、二つは苦聖諦である。苦諦とは、悩ませることを特徴とするので、五取蘊が苦諦と名付けられる。苦聖諦とは、〔苦を〕理解することによって、道を修習する。これを苦聖諦という。

集諦は二種である。一つは集諦、二つは集聖諦である。集諦は生み出すことを特徴とする。すなわち渴愛などの煩惱が集諦と名付けられる。集聖諦とは〔集を〕断じることによって、道を修習するので、集聖諦である。

滅諦は二種である。一つは滅諦、二つは滅聖諦である。滅諦とは寂滅を特徴とする。すなわち、四沙門果が滅諦と名付けられる。滅聖諦とは、〔滅を〕証得することによって、道を歩むので、滅聖諦である。

道諦は二種である。一つは道諦、二つは道聖諦である。道諦とは出離を特徴とする。すなわち、八正道が道諦と名付けられる。道聖諦とは、〔道を〕修習することによって、道を歩むので、道聖諦である。

【答3】また次に、〔四〕諦には総相と別相の二種がある。総相の苦〔諦〕とは、五取蘊である。別相の苦〔諦〕とは、色蘊、受〔蘊〕、想〔蘊〕、行〔蘊〕、識蘊に細かく区別される。

2) 「大正：諦煩惱」は「三宮：諸煩惱」によって訂正。

3) 「三宮：八正道。名爲道諦」。

『禪法要解』

現代語訳

總相集者。能生後身愛⁴⁾。別相集者。廣分別愛等諸煩惱及有漏業五受陰因縁。

總相滅者。能生後身愛盡。別相滅者。廣分別八十九種盡。

總相道者。八聖道。別相道者。廣分別從苦法忍乃至無學道。

若不通達四諦者。則輪轉五道。往來生死無休息時。

總相の集〔諦〕は、後の生涯を生み出す渴愛であり、別相の集〔諦〕は、渴愛等の諸煩惱と有漏業という五取蘊の因縁に細かく区別される。

總相の滅〔諦〕は後の生涯を生み出す渴愛を尽くすことであり、別相の滅〔諦〕は、八十九種〔の結〕を尽くすことに細かく区別される。

總相の道〔諦〕は八聖道であり、別相の道〔諦〕は、苦法忍より無學道に至るまでに細かく区別される。

もし、四諦を通達していないのであれば、五道を輪廻して生死を往来し、休まる時はない。

abodhato hy aprativedhataś ca tattvātmakasyāśya catuṣṭasya /

bhavād bhavaṃ yāti na śāntim eti saṃsāradolām adhiruhya lokāḥ // SN.16.6

以是因縁故。行者應念老病死等一切苦惱皆由有身。譬如一切草木皆從地出。

それ故、行者は「老病死等の一切の苦はすべて身体があることに基づく。例えば、あらゆる草木がすべて地面から生える如くである」と考えるべきである。

tasmāḥ jarāder vyaśanasya mūlaṃ samāsato duḥkham avaihi janma /

sarvauśadhīnām iva bhūr bhavāya sarvāpadāṃ kṣetram idaṃ hi janma // SN.16.7

yaj janma rūpasya hi sendriyasya duḥkhasya tan naikavidhasya janma /

yaḥ saṃbhavaś cāśya samucchrayasya mṛtyoś ca rogasya ca saṃbhavaḥ saḥ // SN.16.8

如經中說。

經に〔次のように〕説かれる通りである。

十方衆生所以有身。皆爲受苦故生。譬如毒食。若好若醜皆爲殺人。

「〔老病死の一切の苦は〕十方の衆生が体を有することに由来し、人々が苦を受けるのは誕生に由来する。例えば毒入りの食事は美味しくても不味くても、どちらにせよ人を殺すことになる如くである。

sad vāpy asad vā viśaṃśram annaṃ yathā vināśāya na dhāraṇāya /

loke tathā tiryag upary adho vā duḥkhāya sarvaṃ na sukhāya janma // SN.16.9

4) 「大正：身受」は「三宮：身愛」によって訂正。

『禪法要解』

現代語訳

若無身心者。老病死苦
則無所寄⁵⁾。如惡風摧
折大樹。若無樹者則無
所壞。

もし、体と心がなかったならば、老病死の苦しみは拠り所
が無い。例えば暴風は大樹を薙ぎ倒すが、〔そもそも〕木
がなければ、薙ぎ倒されるものは無い如くである。

jarādayo naikavidhā prajānāṃ satyāṃ pravṛttau prabhavanty anarthāḥ /
pravātsu ghoreṣv api māruteṣu na hy aprasūtās taravaś calanti // SN.16.10

如是略説身心受苦之本。
如虚空是風之本⁶⁾。木
是火之本。地是水之本。
身是苦之本⁷⁾。

次に簡単に述べると、次の通りである。体〔の受〕と心の
受が苦の根源である。例えば、空間は風の根源であり、木
は火の根源であり、地は水の根源である如く、身体は苦の
根源である。

ākāśayoniḥ pavano yathā hi yathā śamīgarbhaśayo hutāśaḥ /
āpo yathāntarvasudhāśayās ca duḥkhaṃ tathā cittaśarīrayoni // SN.16.11

復次。如地常是堅相。
水常爲濕相。火常爲熱
相。風常爲動相⁸⁾。身
心常爲苦相。

次に、例えば、地は常に堅固さを性質とし、水は常に湿っ
ぽさを性質とし、火は常に熱さを性質とし、風は常に流動
性を性質とする如く、体と心は常に苦しみを性質とする。

apāṃ dravatvaṃ kaṭhinatvaṃ urvyā vāyoś calatvaṃ dhruvaṃ auṣṇyam agneḥ /
yathā svabhāvo hi tathā svabhāvo duḥkhaṃ śarīrasya ca cetasaś ca // SN.16.12

所以者何。以有身故。
則老病死飢渴寒熱風雨
等苦常隨逐之。以有心
故。憂愁怖畏瞋惱嫉妬
等苦常隨逐之。

なぜかといえ、体が有る故に、老・病・死・飢渴・寒
熱・風雨等の苦は、常に、こ〔の体〕に付き従うのであり、
心が有る故に、憂愁・怖畏・瞋惱・嫉妬等の苦は、常に、
こ〔の心〕に付き従うのである。

kāye sati vyādhijarādi duḥkhaṃ kṣuttarṣavarṣoṣṇahimādi caiva /
rūpāśrite cetasi sānubandhe śokāratikrodhabhayādi duḥkhaṃ // SN.16.13

5) 「大正：死苦則無所寄」は「三宮：老病死苦則無所寄」によって訂正。

6) 「大正：如虚空風之本」は「三宮：如虚是風之本」によって訂正。

7) 「宮：身是苦本」。

8) 「宮：風常動相」。

『禪法要解』

現代語訳

若知現在身苦。過去苦 もし、現在の体の苦を知るのであれば、過去の〔体の〕苦
亦爾。如現在過去身苦。 も同様であると〔知る〕。現在と過去の体の苦しみの通り
未來亦爾。 に、未来〔の体の苦〕も同様であると〔知る〕。

pratyakṣam ālokya ca janmaduḥkhaṃ duḥkhaṃ tathāhītam apīti viddhi /
yathā ca tadduḥkhaṃ idaṃ ca duḥkhaṃ duḥkhaṃ tathānāgatam apy avehi // SN.16.14

譬如見今穀種生穀。比 例えば、現在、穀物の種が穀物を生み出すのを見て、類推
知過去未來亦皆如是。 して、過去と未来も同様に〔穀物の種が穀物を生み出すこ
又如現在火熱相。比知 とを〕知る如く、あるいは、例えば現在の火の熱さの性質
過去未來火亦熱如是。 を〔見て〕、類推して、過去と未来の火も同様に熱いと知
る如くである。

bījasvabhāvo hi yattheha dṛṣṭo bhūto 'pi bhavyo 'pi tathānumeyaḥ /
pratyakṣataś ca jvalano yathoṣṇo bhūto 'pi bhavyo 'pi tathoṣṇa eva // SN.16.15

若無身心。前則無苦今 もし、体と心がなければ、過去にも苦しみは無く、今も苦
亦無苦後亦無苦。當知 しみはなく、未来にも苦しみは無いであろう。〔ゆえに、〕
三世苦痛皆從身心而有。 三世の苦痛はすべて心と体が有ることに由来する、と知る
べきである。

tan nāmarūpasya guṇānurūpaṃ yatraiva nirvṛttir udāravṛtta /
tatraiva duḥkhaṃ na hi tadvimuktaṃ
duḥkhaṃ bhaviṣyaty abhavad bhaved vā // SN.16.16

是故應觀苦諦。 このゆえに、苦諦を観察すべきである。
如是心生厭患。是苦因 以上のように心に〔苦に対する〕厭惡を生じる。この苦し
縁。唯從愛等諸煩惱生。 みの因縁は、愛等の煩惱から生じるだけであり、天〔から
非天非時非自然亦非無 生じるの〕でもなく、時間でもなく、自然にでもなく、因
因縁。 縁がなくでもない。

pravṛttiduḥkhasya ca tasya loke tṛṣṇādayo doṣagaṇā nimittaṃ /
naiveśvaro na prakṛtirnaṃ kālo nāpi svabhāvo na vidhir yadṛcchā // SN.16.17

若離煩惱則不有生。當 もし、煩惱を離れたならば、誕生が有ることはない。世間の
知世間皆從愛等煩惱生。 人々は渴愛などの煩惱から生じると知るべきである。

jñātavyam etena ca kāraṇena lokasya doṣebhya iti pravṛttiḥ /
yasmān mriyante sarajastamaskā na jāyate vītarajastamaskā // SN.16.18

『禅法要解』

現代語訳

如人造事皆以欲爲先⁹⁾。 例えば、人が何かをなそうとする時は、「欲」が〔それよりも〕先にある様である。したがって、〔人が誕生する時には「望みである渴愛等の諸煩惱」がそれよりも先にあるのであり、〕諸々の煩惱が苦の因縁なのである。

icchāviśeṣe sati tatra tatra yānāsanāder bhavati prayogaḥ /
yasmād atas tarṣavaśāt tathaiva janma prajānām iti veditavyam // SN.16.19

復次由愛水故受身。若 又たつぎに、愛という水に由来して肉体を享受する。もし
無愛水則不受身。如乾 愛という水が無かったならば、肉体を享受することはない。
土不能著壁。以水和 例えば、土が乾いたならば壁に付着することはないが、水
之¹⁰⁾則有所著。 がこ〔の土〕と合わさったならば〔壁に〕付着することが
ある如くである。

sattvāny abhiṣvaṅgavaśāni dr̥ṣṭvā svajātiṣu pr̥tīparāṇy atīva /
abhyāsayogād upapāditāni tair eva doṣair iti tāni viddhi // SN.16.20

復次因諸煩惱異故¹¹⁾受 又たつぎに、諸煩惱が異なる故に、肉体を享受しても、
身種種不同。 〔各々の肉体は〕様々であり、同じことはない。

krodhapraharṣādibhir āśrayāṇām utpadyate ceha yathā viśeṣaḥ /
tathaiva janmasv api naikarūpo nirvartate kleśakṛto viśeṣaḥ // SN.16.21

如多欲者受多欲形。多 若し、欲の多い者は、欲の多い姿を享受し、瞋恚の多い者
瞋恚者受多瞋恚形¹²⁾。 は瞋恚の多い姿を享受し、癡の多い者は癡の多い姿を享受
多癡者受多癡形。煩惱 し、煩惱の少ない者は、煩惱の少ない姿を享受する通りで
薄者受薄煩惱形。 ある。

doṣādhike janmani tīvradoṣa utpadyate rāgiṇi tīvraṛāgaḥ /
mohādhike mohabalādhikaś ca tadalpadoṣe ca tadalpadoṣaḥ // SN.16.22

9) 「大正：欲以爲先」は「三宮：以欲爲先」によって訂正。

10) 「三宮：如水和之」。

11) 「大正：煩惱是故」は「三宮：煩惱異故」によって訂正。

12) 「宮：多瞋形」。

『禪法要解』

現代語訳

見今果報異故。知昔因縁各別。來世隨煩惱受身差別亦如是。

現世において、果報〔としての姿〕が異なることから、過去世の因縁が各々異なることを知る。来世においても、〔現世の〕煩惱により、姿の差別を享受するのも〔現世において異なるのと〕同様である。

phalaṃ hi yādṛk samavaiti sākṣāt tadāgamād bījaṃ avaity atītaṃ /
avetya bījaprakṛtiṃ ca sākṣād anāgataṃ tatphalaṃ abhyupaiti // SN.16.23

隨業受身¹³⁾。若不爲瞋恚則不受毒蛇形。一切餘形亦如是。

〔現世の〕業にしたがって、〔来世の〕身体を享受する。もし、瞋恚を起こさなければ、毒蛇の身体を享受することはない。あらゆる他の姿も同様である。

doṣakṣayo jātiṣu yāsu yasya vairāgyatas tāsu na jāyate saḥ /
doṣāsayas tiṣṭhati yasya yatra tasyopapattir vivaśasya tatra // SN.16.24

以是故當知愛等諸煩惱一切苦因縁。

以上のことから、愛等の諸々の煩惱が一切の苦の因縁であると知るべきである。

taj janmano naikavidhasya saumya tṛṣṇādayo hetava ity avetya /
tāṃś chindhi duḥkhād yadi nirmumukṣā kāryakṣayaḥ kāraṇasaṃkṣayād dhi // SN.16.25

苦因縁盡故則苦盡得涅槃¹⁴⁾。涅槃名離欲。斷諸煩惱常不變異。

苦の因縁が尽きることから、苦も尽き、涅槃を獲得する。涅槃は離欲ともいい、諸々の煩惱を断じた状態であり、常に変異することはない。

duḥkhakṣayo hetuparikṣayāc ca śāntaṃ śivaṃ sākṣi kuruṣva dharmāṃ /
tṛṣṇāvirāgaṃ layanaṃ nirodhaṃ sanātanaṃ trāṇaṃ ahāryaṃ āryaṃ // SN.16.26

13) 「大正：隨業受身」、「三：隨受身」、「宮：隨業受身より一切餘形亦如是までの二十二文字が欠落」。梵本（『サウンダラナンド』ネパール写本）ではSN.16.21-24にあるように過去世の煩惱によって現世の身の決定があると説かれ、三本の読みに近い。しかし、田中〔2019a〕において示したように、譬喩師や法救は諸煩惱によって誕生が有り、諸業によって境遇が決まると述べ、『俱舍論』等でも同種の説示が認められる。その場合は三本よりも大正の読みに近い。今は仮に大正の読みを採用する。

14) 「大正：苦盡涅槃」は「三宮：苦盡得涅槃」によって訂正。

『禪法要解』

現代語訳

是中無生無老無病無死。こ〔の涅槃〕においては、生無く、老無く、病無く、死無
無愛別離苦怨憎會苦。く、愛別離苦無く、怨憎會苦も無く、常に樂であり、〔こ
常樂不退。の境地から〕退くことは無い。

yasmin na jātir na jarā na mṛtyur na vyādhayo nāpriyasamprayogaḥ /
necchāvipan na priyaviprayogaḥ kṣemaṃ padaṃ naiṣṭhikam acyutaṃ tat // SN.16.27

行者得涅槃滅度時都無 行者が涅槃を得て滅度する時、どこにも行く所はない。
所去。名爲寂滅。譬如 〔これを〕寂滅という。例えば、油火の油が尽きたならば、
然燈膏盡則滅不至諸方。〔火は〕滅し、どこかに行ってしまったのではない如くで
是名滅諦。ある。これを滅諦という。

dīpo yathā nirvṛtim abhyupeto naivāvaniṃ gacchati nāntarikṣam /
diśaṃ na kāmciḍ vidiśaṃ na kāmciṭ snehakṣayāt kevalam eti śāntim // SN.16.28
evaṃ kṛtī nirvṛtim abhyupeto naivāvaniṃ gacchati nāntarikṣam /
diśaṃ na kāmciḍ vidiśaṃ na kāmciṭ kleśakṣayāt kevalam eti śāntim // SN.16.29

得涅槃方便道。定分有 涅槃を獲得するための方法としての道は定分に三種が有り、
三種。慧分有二種。戒 慧分に二種が有り、戒分に三種が有る。この戒に住して、
分有三種。住是戒中修 定と慧を修習する¹⁵⁾。
行定慧。

asyābhyupāyo 'dhigamāya mārgaḥ prajñātrikalpaḥ praśamadvikalpaḥ /
sa bhāvanīyo vidhivad budhena śīle śucau tripramukhe sthitena // SN.16.30

所謂於四諦中慧能決了。すなわち、四諦に対して慧が決択する、というのが正見で
是名正見。隨正見覺法 ある。正見に随って覺法が生起する、というのが正思惟で
發起。是爲正思惟。是 ある。これらが慧分の二種と言われる。
名慧分二種。

satyeṣu duḥkhādiṣu dṛṣṭirāryā samyag vitarkaś ca parākramaś ca /
idaṃ trayam jñānavidhau pravṛttaṃ prajñāśrayaṃ kleśaparikṣayāya // SN.16.32

15) 道諦の説示に関しては、ネパール写真に基づく Johnston [1928] と Hartmann [1988] の中央アジア写本で異なる。その中、『禪法要解』は、Johnston [1928] ではなく Hartmann [1988] と対応する。2の点については拙稿 [2019b] を参照。しかし、今は Johnston [1928] の該当箇所をあげる。

『禪法要解』

現代語訳

正定正念正精進。是名 正定、正念、正精進、これらが定分の三種と言われる。
定分三種。

nyāyena satyādhigamāya yuktā samyak smṛtiḥ samyagatho samādhiḥ /
idaṃ dvayaṃ yogavidhau pravṛttaṃ śamāśrayaṃ cittaparigrahāya // SN.16.33

正語正業正命。是名戒 正語、正業、正命、これらが戒分の三種と言われる。
分三種。

vākkarma samyak sahakāyakarma yathāvad ājīvanayaś ca śuddhaḥ /
idaṃ trayaṃ vṛttavidhau pravṛttaṃ śīlāśrayaṃ karmaaparigrahāya // SN.16.31

住淨戒故。諸煩惱芽¹⁶⁾ 清らかな戒に住する故に、諸煩惱の芽は成長させられるこ
不令増長。勢力衰薄。 となく、〔諸煩惱の〕勢力は衰えさせる。例えば、不適切
如非時種芽不増長¹⁷⁾。 な季節が種の芽を成長させない如くである。

kleśāṅkurān na pratanoti śīlaṃ bījāṅkurān kāla ivātivṛttaḥ /
śucau hi śīle puruṣasya doṣā manaḥ salajjā iva dharṣayanti // SN.16.34

諸煩惱力來。定分能遮。 諸々の煩惱の勢力がやってきたとしても、定分は〔それ
如大山堰水¹⁸⁾。水不能 を〕妨げることができる。例えば、大きな山が水を堰き止
破壊¹⁹⁾。譬如呪術能禁 め、水が〔その山を〕打ち破ることができない如くである。
毒蛇。雖復有毒不能害 あるいは、呪術が毒蛇を禁じて、毒があっても人を害する
人。定分亦如是。 ことをできなくする様に、定分も同じ様に〔諸煩惱を妨げ
る〕。

kleśāṃs tu viṣkambhayate samādhir vegān ivādrir mahato nadīnām /
sthithe samādhau hi na dharṣayanti doṣā bhujaṃgā iva mantrabaddhāḥ // SN.16.35

慧能拔諸煩惱根本。如 慧は諸煩惱を根絶やしにすることができる。例えば雨季の
夏水暴漲²⁰⁾ 岸上諸樹無 川が氾濫して、岸辺の樹々を抜き去らないことが無い如く
不漂拔。 である。

prajñā tv aśeṣeṇa nihanti doṣāṃs tīradrumān prāvṛṣi nimnageva /
dagdhā yayā na prabhavanti doṣā vajrāgninevānusṛtena vṛkṣāḥ // SN.16.36

16) 「宋宮：諸煩惱芽」。

17) 「宋宮：牙不増長」。

18) 「宮：堰水」。

19) 「三宮：水不能壊」。

20) 「三宮：夏水暴長」。

『禪法要解』

現代語訳

行此三分八道眞直正路。 以上の三分からなる八道の正しい道を歩んだならば、苦の
能滅苦因。畢竟安隱常 原因を滅することができる。〔その境地は〕究極的に安穩
樂無爲。 であり、常樂であり、無為である。

triskandham etaṃ pravigāhya mārgaṃ prapaṣṭam aṣṭāṅgaṃ ahāryam āryaṃ /
duḥkhasya hetūn prajahāti doṣān prāpnoti cātyantaśivaṃ padaṃ tat // SN.16.37

若方便初習其門則有十 事。 もし、手段〔である道（道諦の修習）〕に着手し始めたな
らば、〔その者には次の〕十の性質（心專正。質直。慚愧。
不放逸。遠離。少欲。知足。不繫著。不樂世樂。忍辱。）
が有る。

asyopacāre dhṛtir ārjavaṃ ca hrīr apramādaḥ praviviktatā ca /
alpecchatā tuṣṭir asaṃgatā ca lokapravṛttāv aratīḥ kṣamā ca // SN.16.38

一者心專正。種種外事 第一は、心の堅固さ（*dhṛti）²¹⁾ である。〔これは〕様々な
來壞不能移轉。如四邊 外的な事象がやってきて脅かすとしても、〔心を〕動かす
風起山不傾動。 ことはできない〔性質である〕。例えば、四方から風が吹
いたとしても山は動くことが無い如くである。

二者質直。聞師說法不 第二は、素直さ（*ārjava）である。〔これは〕師匠の説法
見長短。心無増減隨教 を聞いて、良い悪いを判断せず、心で〔内容を〕増減する
無疑。譬如入稠林採木 ことなく、教えに随い、疑わない〔性質である〕。例えば
直者易出曲者難出。如 深い森に入って木を採る時に、まっすぐな〔木〕は〔森から〕
是三界稠林。直者易出 出しやすいが、曲がった〔木〕は〔森から〕出しにく
曲者難出。佛法中唯直 い如くである。同じ様に、三界は深い森であり、素直な者
是用曲者遺棄。 は出しやすく、曲がった者は出し難い。仏の教えにおいては
素直さだけを用い、素直ではない性質を捨てる。

21) 以下、十種の項目は SN.16.38 に対する説明であり、それぞれの項目は SN.16.38 に挙げられた十項目に対応する。当該の解説は SN. に並行句を見いだせないが、他の文献より抽出が可能である。その点については『禪法要解』を分析する別稿において紹介したい。

『禪法要解』

三者慚愧²²⁾。是第一上服最妙莊嚴。慚愧²³⁾爲鉤制諸惡心。有慚有愧眞²⁴⁾爲是人。若無慚愧²⁵⁾畜生無異。

四者不放逸。一切善法之根本。如世間放逸失諸利事。行者放逸失涅槃利。當知放逸如怨如賊。心常遠離。當知不放逸如君父師長。應遵承不捨。

五者遠離。因此遠離成不放逸。若近五欲諸情開發。先常身離聚落²⁷⁾。次心遠離不念世事。

六者少欲。資生之物心不多求。多求故則墮衆惱。

七者知足。有人雖復少欲。樂著好物則敗道心。是故智者趣足而已。

現代語訳

第三は慚愧 (*hrī)²⁶⁾である。こ〔の慚愧は〕最も優れた衣であり、最も妙なる莊嚴である。慚愧を鉤として、諸々の惡心を制御する。慚が有り、愧が有る人が眞の人である。もし慚愧がなければ畜生と違いはない。

第四は不放逸 (*apramāda) である。〔不放逸は〕一切の善法の根源である。世間で放逸であれば諸々の利益を失う様に、行者が放逸であれば涅槃という利益を失う。放逸は恨みを持つものや賊の様に心から常に離しておくものと知るべきであり、不放逸は主君や父のような目上の者の様に尊重して捨てるてはならないと知るべきである。

第五は遠離 (*praviviktatā) である。この遠離に基づいて不放逸を成り立たせる。もし五欲の対象に近づいてしまったならば、諸々の感情が沸き起こる。〔ゆえに、〕先ずは常に体を集落から離して、次に心も離して、世俗の事象を思い出さないようにする。

六つ目は少欲 (*alpecchatā) である。〔これは〕生活資具に対して心が多くを求めない〔性質である〕。〔心が〕多く求めると多くの悩みに陥ってしまう。

第七は知足 (*tuṣṭi) である。ある人が少欲であっても、好ましい物に貪着していると、解脱を目指す心は折れてしまう。このゆえに、智者は得たものだけで足りているとする。

22) 「三宮：慚愧」。

23) 同上。

24) 「三宮：有慚有愧直爲是人」。

25) 「三宮：若無慚愧」。

26) 有部のアビダルマの伝統では慚愧という場合、慚は hrī をさし、愧は apatrāpya を示し、ともに恥であるもののそれぞれ異なる性質の恥として説明する。例えば慚は自身と照らして恥じ、愧は他者と照らして恥じるといった具合である。しかし、hrī の語だけの訳語としても「慚愧」が用いられることもある。そこで本稿では有部アビダルマと相違するものの、馬鳴詩の hrī はあえて慚愧と翻訳した。

27) 「三宮：先當身離聚落」。

『禪法要解』

八者心不繫著。若弟子檀越知識親里。若問訊迎送多營多事²⁸⁾。如是等者毀敗道故不應繫著。九者不樂世樂。若歌舞伎樂。良時好日選擇吉凶。一切世事悉不喜樂。十者忍辱。行者求道時。當忍十事。一蚊虻侵害。二蛇虻毒螫²⁹⁾。三者毒獸。四者罵詈誹謗。五者打擲加害³⁰⁾。六者病痛。七飢。八渴。九寒。十熱。如是惱事³¹⁾。行者忍之莫令有勝。常勝此事。復次如人識知病相。知病因緣。知除病藥。得看病人。隨意所須不久當差³²⁾。行者如是。知實苦相。知苦因緣。知苦盡道。知得善師同學。如是不久得安隱寂滅。

現代語訳

第八は心の不繫著（*asaṃgatā）である。もし弟子や檀家が親族や故郷を知り、あるいは、尋ね、送迎すれば、多くのことを多く営むのであろう。そのようなことがらは修行を損なうので、繫著してはならない。

第九は不樂世樂（*lokapravṛttāv aratīḥ）である。もし、歌舞伎樂があるならば、良時や好日や、吉凶を選ぶが、このようなあらゆる世俗的な事柄を喜ばない。

第十は忍辱（*kṣamā）である。行者が道を求めている時には十のことを耐え忍ぶべきである。第一は蚊や虻といった虫の侵害、第二は蛇や毛虫といった毒虫〔の侵害〕、第三は毒を持つ獣〔の侵害〕、第四は罵倒や誹謗、第五は打撃などの攻撃、第六は病気の痛み、第七は飢え、第八は渴き、第九は寒さ、第十は暑さ、このような悩ましい事柄である。修行者はこれらを耐え忍び、〔これらが〕勝利することは有ってはならない。〔行者は、〕これらのことに常に打ち勝つのである。

またつぎに、例えば、人が病気の有様を知り、病気の因縁を知り、病気を治す薬を知って、看病人を得る。そして、適宜に、速やかに治療すべきである様に、その様に行者は正しい苦の有様を知り、苦の因縁を知り、苦を尽くす道を知り、善き師や友人を得ると知る。先の通りに、速やかに安穩なる寂滅を得る〔べきである〕。

yāthātmyato vindati yo hi duḥkhaṃ tasyodbhavaṃ tasya ca yo nirodhaṃ /
āryeṇa māreṇa sa śāntim-eti kalyāṇamittraiḥ saha vartamānaḥ // SN.16.39
yo vyādhito vyādhim avaiti samyag vyādhher nidānaṃ ca tadauśadhaṃ ca /
ārogyam āpnoti hi so 'cireṇa mittrair abhijñair upacaryamāṇaḥ // SN.16.40

28) 「宮：多勞多事」。

29) 「三宮：虺虻毒螫」。

30) 「三宮：三毒獸。四罵詈誹謗。五打擲加害」。

31) 「三宮：如是等惱事」。

32) 「三宮：當瘥」。

Abbreviation

SN. *Saundarananda*, Johnston, E. H.[1928]

大正 『大正新脩大藏經』

三 宋元明三本

宮 宮内省図書寮本（旧宋本）

Bibliography

- Johnston, E. H.[1928] *The Saundarananda of Āśvaghoṣa critically edited with notes*. Oxford University Press.
- Hartmann, Jens-Uwe[1988] “Neue Āśvaghoṣa- und Mātrceṭa-Fragmente aus Ostturkistan.” *Nachrichten von der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*. 2: 55-92.
- 上野牧生 [2015] 「アシュヴァゴーシャの失われた莊嚴經論」『インド論理学研究』第Ⅷ号松田和信教授還暦記念号 pp.203-234.
- 菅野竜清 [1994] 「大智度論における馬鳴著作の引用について」『印度学仏教学研究』通号86号 pp. 194-197.
- 菅野竜清 [1995] 「大智度論における禪波羅蜜義について」『宗教研究』通号303号 pp. 244-245 (R)
- 菅野竜清 [1998] 「大莊嚴論訳者再考」『印度学仏教学研究』通号93号 pp. 79-82.
- 菅野竜清 [2002] 「鳩摩羅什訳禪經類について」『仏教学仏教史論集：佐々木孝憲博士古稀記念論集』 pp. 77-90.
- 田中裕成 [2015] 「『坐禪三昧經』における出世間道」『佛教大学仏教学会紀要』佛教大学, 20号, pp. 125-146.
- 田中裕成 [2019a] 「《婆沙論》における阿毘達磨論師と分別論師と譬喩師の四聖諦説」、『佛教大学大学院紀要』47, (予定).
- 田中裕成 [2019b] 「『サウンドラナンダ』の四諦説にみる2つの系統」、『印度学仏教学研究』(予定).
- 本庄良文 [1987] 「馬鳴詩のなかの經部説」『印仏研』通号71号, pp. 87-92 (L).
- 松濤誠廉 [1954] 「瑜伽行派の祖としての馬鳴」、『大正大學研究紀要文學部・佛教學部』39, pp. 191-224.
- 松濤誠廉 [1981] 『馬鳴端正なる難陀』、山喜房仏書林。